第1回ESDティーチャー・フォローアップ研修会 概要報告

大西　浩明

◇日時　　2026 年 5 月 2 6 日（火）19 時～20 時 30 分
◇方法　　Zoom によるオンライン方式
◇参加者　28 名

◇実践報告　　鹿児島県鹿屋市立鹿屋小学校　上園弘太郎先生
「『楽しかった！』で終わらせない総合の授業」
～「地域を知る」から「地域に関わる」へ ～

【実践概要】
鹿屋市･･･野菜、畜産など　第一次産業が基幹作業　　JR が廃線になって交通の便が不便な地域
掩体壕（えんたいごう：戦時中、飛行機を隠すためのもの）が残っている　→　特攻基地があった
知覧よりも特攻隊の戦死者が多い
地方都市でありながら、自然が豊かで地域全体が「学びの宝庫」
恵まれているからこその「落とし穴」･･･地域素材が豊富がゆえ、活動が「点」になりやすい
「楽しかった」で終わってしまう（素材を体験として消費してしまう）
→　子どもの問いと学びの必然性をつなぐ　　探究の過程に「必然性」をもって位置付ける
高学年の２年間を貫くテーマ「生かそう鹿屋の恵み　つなごうわたしたちの未来」
５年と６年の学びを分断させず、一つの大きな傘の下で連続させる

（５年生）食・いのち・環境・地域のつながりに気づく、根拠ある事実を蓄積する
米づくりをメインに　　代掻きでは泥んこになって体験、苗植え（農業高校の生徒と協働）
夏になると、タニシによって食べられてしまう箇所が出てくる
「農薬を使って駆除すれば？」「そもそもタニシってどんな生き物？」　　問いの発生
高校生に聞く　→　高校生との対話が、単純な「害虫駆除」から農業の奥深さへ導く
田んぼは米を育てるだけの場所ではないという気づき
イネの利用（藁の活用）　　わらぼうきを作ってみた
「農薬を使うか、使わないか」という単純な二項対立ではなく、環境、経済、安心などが複雑に絡み合う「システム」として農業を捉え始めた
・市販米と有機栽培米の食べ比べ（味覚の違いとそこにある価値の発見）
・栄養教諭による食育と体づくりの講話（食べることは命をもらうこと）
・市農政課の方から地産地消の仕組みを学ぶ（農業と畜産のつながり、堆肥や飼料の循環）
単なる楽しい農業体験から主体的参画者へ

（６年生）地域の価値を相手や目的に応じて発信し、協働的に社会に働きかける
「鹿屋 PR プロジェクト」
現在の豊かさは、多くの人の願いや努力の上にある　→　今の自分たちにできることは？
鹿屋市のふるさと納税約 35 億円によって、給食費の無償化、グリーンベルトの敷設が実現
全国の人に「鹿屋を PR したい」、「お礼をしたい」を実現するには？

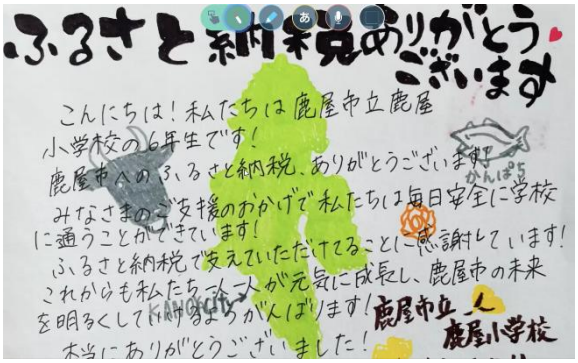
市ふるさと PR 課の方に来ていただいてアドバイスをもらう

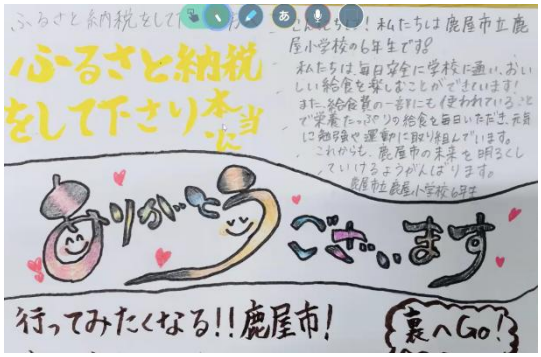
→　ふるさと納税の返礼品にお礼の手紙を入れてもらう　　どの企業に？

「うしの中山」が協力してくれて出前授業

「UshiDGs」(耕作放棄地・グリーンカーテンの活用、竹の廃材活用)の取組

手紙の作成（国語の単元として）





ご当地キャラクター「カンパチロウ」PR 大作戦（ふるさと納税アップのために）

自分たちの学びを他校の人たちに知らせたい

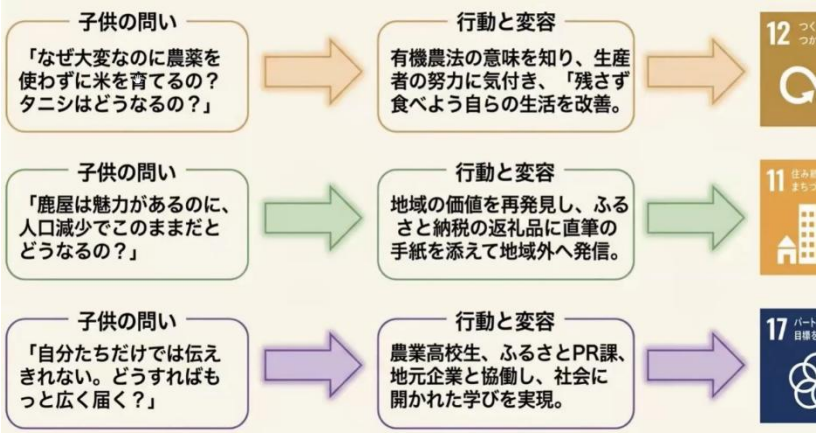
・奈良女子高校

・薩摩川内市立市比野小学校

・埼玉県蕨市立北小学校

「鹿屋の当たり前は、当たり前ではない」「相手に合わせた分かりやすい伝え方を」という気づき

SDGs は前提ではなく、探究の結果である



カリキュラムマネジメントという

探究の糸によって

５年から６年への学びの接続

点から線になる探究のサイクル

大人との本気の協働

相手と目的に応じた発信

地域を「自分事」へ

【質疑応答、意見交流】

・子どもたちの活動が、「地域づくり」まで発展しているところが素晴らしいと思う。

・ふるさと納税に目を向けるというのがおもしろい。

・発信が多い。交流をするときにどういうところとつながろうとしているのか？

→　ティーチャープログラムでのつながりが大きい。校種を超えた交流も、新たな気付きが合ってよかったと思う。３回することで、相手を意識した発表もできるようになってきた。

・何時間での取組？　→　結果的に 60 時間になった

・大変だったことは？　→　学年内での調整が難しい。持続可能な実践でないのではないか。

・子どもたちのこのあとの変容は？

→　自己肯定感の低い子どもが多かったので、社会とつながるという経験が大きかった。

・今後考えている活動は？

→　１学期熊本の修学旅行、２学期「平和学習」、３学期「将来の夢」をうまくつなげていきたい。熊本の地震からの復興を通して、人の営みや思いを中心にしながら、地域をよりよくする取組に。

・子どもの問いから始まるからこそ、これだけの実践になる。そんな子どもの問いの生み出し方は？

→　子どもの印象に残るような体験をまずはさせている。米づくりなら、代掻きの段階でタニシという謎の生き物との出会い。教師が「えっ？」と思ったものは、きっと子どもも同じように感じるのではないだろうか。ふるさと納税の方は、ある程度教師側からそういう問いが出るように仕掛けた部分がある。

・「SDGs は前提ではなく、探究の結果である」という言葉が心に刺さった。現場は、どうしても SDGs を理解させてから取り組もうとしている。

・子どもたちの夢が叶うストーリーを、先生自身が明確に持てているのは、カリキュラムマネジメントがしっかりとできているからだと感じた。

・平和学習と米づくりを、無理やりではなく、こういうつなげ方もあるのかと新しい視点を得た。

・文科省の言っている、「個別最適な学びと協働的な学びの一体化の充実」は ESD にとっても大事な部分だと思う。一人でずっと課題を追い続けるのではなく、途中みんなで「あーでもない、こーでもない」と、互いの違う価値観をもとに学び合うから ESD としても成立すると思う。

・平和学習は、どうしても重苦しいものになってしまいがちだが、難しくても最後には明るい未来に向かって考えられる学びにしていきたい。